
仮面ライダーBEST ~一番となる者のキセキ~

時流 明日無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーBEST

〜一番となる者のキセキ〜

【Nコード】

N1916W

【作者名】

時流 明日無

【あらすじ】

ある世界、私達と同じ様に時が進み、私達と同じ様に物が動き、私達と同じ様に明日がある世界。テレビも私達と同じ様に放送されています。勿論、仮面ライダーも。

しかし、私達の世界には無いとされている仮面ライダーがその世界にはいました。物語がはじまる、その時までは人知れず、人々を守っていました。

彼は一番となる者。総ての一番となる者。

これは、ある世界で、起こった仮面ライダー達の物語。信じるかは

…自由ですが。

登場人物&オリジナルライダー紹介（前書き）

本作オリジナルのキャラ達の設定の要約を公開します。

随時更新する事があります、ご了承ください。

登場人物&オリジナルライター紹介

高見大智 (Daiti Takami)

本作の主人公であり仮面ライダーBEST。年齢は多分17。渚沙高校の二年生。

成績はイイらしいが英語と芸術がニガテらしい。理系。

冷静沉着で確実な策などは得意だが危険を犯す行為はあまり好きじゃない奥の手タイプ。

本作開始までずっと一人(と三体)で戦っていた。本作開始までに封印したサイラは75体。

海斗「メタい話なんだけど、大智の苗字の高見は『高みを目指す』って言う意味らしい」

士「…何処ぞの天の道を往くフリーターを彷彿させるな…」

佐原麻衣 Mai Sahara

本作の主人公その2。年齢は恐らく17。渚沙高校の二年生。成績は大智より少し下。文系。しかし社会がニガテらしい。

基本的に活動的で笑顔明るい…そう、天道樹花を大人しくした感じである。

大智「そう言えば今のとこ麻衣以外の女性キャラは0だな」

エリカ「私ロボットですもんね」

海斗「メタいが、麻衣は光夏海と天道樹花を合わせた感じにしようとしてたらしい」

一之瀬海斗 Kaito Itinose

本作の主人公その3。年齢は確か17。渚沙高校の二年生。

成績は平均くらい。主教科より副教科の方が成績がいいらしい。文

系。

好奇心旺盛であり、少年のような心の持ち主。もちろん仮面ライダーについても一定の知識がある。

麻衣「海斗ってかなり海をイメージして作られたみたいだよ。名前もそうだけど」

大智「仮面ライダーに対する情熱が一番強いな」

ツバサ 01-system Tubasa

TAKAMILABが開発した高性能次世代型ロボットの初号機。初号機ではあるがその性能は02及び03に負けず劣らずである。仕事にはマジメで主に情報収集、処理を行う。

またG5装着員として後方支援も担当する。
海斗とはかなり仲が良いようだ。

エリカ 02-system Erika

同研究所が開発したロボットの二号機。

研究所内のデータ管理と金銭管理をしている。しつかり者でお母さんの存在だが、接し方が友人的存在であるためそれが目立たない。またG5と直接連絡をとったりサイラ感知装置も担当している。
麻衣とはかなり仲が良いようだ。

ダイキ 03-system Daiki

同研究所が開発したロボットの三号機。

研究・開発部門担当。大智に開発や研究について教えたりG5強化や大智の父さんが残した開発プロジェクトを進めている。

料理が趣味。ロボットにも趣味あっていいじゃ無いですか。腕前は余裕で店出せるほどだが当の本人（本体？）は「俺の料理には温もりが無い」と言う。

G5装着員として後方支援も担当する。

麻依「こうしてみるとホントに人間に近いよね…」

大智「さてと…ツバサ達ロボットがいて変身する…その理由なんです…」

明日無「第一の理由はぶっちゃけ人間を“改造”でなく“創造”してもいいんじゃないか!？との理由ですね」

海斗「二つ目は？」

明日無「…そのうち本編で書くつもりです（あくまでつもりです!）…が、ヒントとしては…」

レジェンド・カオス（その度サイラなど）

…超古代に人間が楽を求めたために人間が作った。

ツバサ・エリカ・ダイキ

…現代にカオス達の暴走を緩和するために人間に作られた。

です」

麻依「…殆ど答えじゃない？」

仮面ライダーBEST

本作オリジナルライダー。

様々な記憶を使って大智が変身する。

ベストフォーム

“一番”の記憶の変身体。

基本的に相手の出方を探れるベースフォームとなるのでまずはこれ

に変身する。

黒くスタイリッシュなボディが特徴。

使用可能カード…この他にもあります、がそれは出てきてからの
楽しみ

BEST Attackカード…ライダーパンチ

BEST Final Attackカード…BESTキック

登場人物&オリジナルライター紹介（後書き）

最後に…

何度かチェックはしておりますが、本編中に誤字等ありましたらご報告下さい。お願いします。

序章

??「はあ、はあ、はあ・・・」

夜、一人の女性が街灯もまばらな道を走っている。

タン、タン、タンとほぼ規則正しくアスファルトを踏みつけながら薄暗い雨の中はしっている。

体力も限界に近いだろう。

だが、なにかにおびえるように震える両手を握り締め走る、走る、走る。

??「はあ、はあ・・・ふう・・・」

ここまでくれば大丈夫・・・と自分に言い聞かせながらまだ荒い息を整えている。

少し雨もさつきから降っている。

見ると、この女性、まだ十代のような。

雨に打たれながら壁を背もたれに力なく立つ。

頭上の蛍光灯は点滅している。

早く逃げなくては・・・そう思いながらまだ荒れる息を整えている。

その時

「……?」はッ?逃げられるとでも?」

突然闇の中から現れた異形の者に抵抗する間なくのど元を絞められる。

苦しみなながらもぐがが時すでに遅し。

異形の者は「ククク……」と笑いながら右手を握り締め振りかぶる。

チチチチチチ……プツン……

蛍光灯の灯りが完全に落ちた。

第一話 ライダー、登場

??「はっ!？」

嫌な夢を見た…まただ…

最近あんな夢ばっか見る。

体調を崩したのだろうか？

もしかして、これが予知夢ってやつ？

あの女の人はどうなったんだろう…

様々な憶測が飛び交う…

母「麻衣、早く支度して学校に行きなさい!」

母の言葉で憶測の世界から引きずり出される

麻衣「はあい」

私は一階に降りた。

麻衣「遅れました、私は、佐原麻衣です。」

高校二年生、青春真っ只中。

私についてはこのくらいで…

私に通う学校、市立渚沙高等学校は私の住む渚沙の街の中央にあつて、市立ながら他の公立高等学校のような風潮は無く、ほとんど私立みたいだに生徒は生活出来た。そのためわざわざ引っ越しやアパートを借りてまでここにこようとする学生も多いみたい。

ただ、渚沙市唯一の公立高校のため渚沙市の高校生は大体ここか、私立に行く。

渚沙市は小さな町でわないよ。むしろ、風都並みの発展をしている。風都との決定的な違いはあの巨大風車などの風車や遊園地が風都にはあつたが、渚沙市には水族館があるというところかな。

風都が風の都なら渚沙は海の都と言つべきだね。

…と、まあ、渚沙市の説明はこの程度かな？

??「さつきから誰と喋つてんの？」

麻衣「うわ!?!。…あ…海斗か…」

海斗「俺の扱い酷くない!?!」

あ、こいつは…

海斗「俺は一之瀬海斗!!麻衣と同じ高2!!よろしくなっ(^ _ ^)」

麻衣「…はたから見たら変人だよ?海斗。」

しかもウイソクまで決めちゃって…

っていつかなんで私の心が読めたの!?

海斗「気にしたら負けだよ(^ O ^)」

麻衣「なんで読めたの!？」

ねえ、初回でもうこんなだなんて嫌だよ?これから続くの?...はあ...

ま、海斗は、小学校から一緒に家も近かったから付き合い長いんだ...ウザいと思う時(例、さっきの会話)あるけど、ま、いい奴だから憎めない...

??「おい、お前ら、このままだと遅刻だぞ？」

海斗「え!?!うわ、やべっ!！」

麻衣「あれ?大智くんにしては遅いね。」

あ、こいつは高見大智。高2

小学校のとき海斗と私と大智の三人で良く遊んでたんだ。中学校の時分かれちゃったんだけど高校で再会した...って感じかな。

確か中学校のときお父さんを事故で亡くして、今は生家にいる母親と文通でやりとりしながらアパート借りて生活してるらしい。

大智「ああ、ちょっとな。とりあえず、バイクある海斗はおいといて、麻衣、乗れ?じゃないと遅刻だ。」

ポンッとヘルメットを投げ渡され、私は衝動的にかぶりバイクにまたがる。

大智「しっかりつかまってる。」

麻衣「うん。」

海斗「あ、ちよっ!2人共!！」

麻衣「よし、やっと帰れるっ」

海斗「麻衣、帰りか？送ってやるよ。」

あ、ちなみに私達は部活をしていない。だけど補習で今はもう6時半だ。

大智はバイトのためにもう帰っている。

麻衣「うーん、お言葉に甘えさせてもらおうかな？」

海斗「んで、途中で「カフェくりいむ」によってシュークリーム買
うか？」

麻衣「だね あそこのシュークリームホント美味しいからね。」

早くいこ」

海斗「あ、ちよつまで！！麻衣！」

いつもと変わらない何気ない会話。

だったのに…

—————

カフェくりいむは渚沙市で知らない人はいないくらい有名な洋菓子店で、中でも「おつきなしゆうくりいむ」は一日千個以上を売り上げる人気商品。混んでいたけど、そこは海斗がパツパツと慣れた手つきでシュークリーム3個を買ってくれた。

海斗「はい、シュークリーム。」

そっぴいながら海斗はその一つにかぶりつく。

麻衣「ありがと。ん〜！美味しい！！」

海斗は終始笑顔でシュークリームをたいらげると「よし、帰るか」と言ったので私も店をでた。ちなみに残りの一つは私の分である。

海斗「明日は休日だあゝ 学校ないゝ」
と鼻歌交じりで駐車場につく…が、

??? 『グガガッ』

突然、怪物があらわれ、襲いかかってくる。

海斗「あぶねっ！何だこいつ…一体何が起こってんだ…」

海斗が呟くようにいう。

しかし、目の前の怪物…よくみたら蝶のようなのに人間の形をした怪物はなおも襲ってくる。

海斗「まずい、逃げろ！」

海斗の叫びで私は我に帰る。

そしと全力で海斗と逃げた。

夢で見たあの風景と同じ道を同じように走って逃げる。違うのは海斗の存在だけ。

麻衣「はあっはあっはあっ…」

もうどれだけ走ったんだろう…

海斗「麻衣、こっちだ！」

海斗がいったところは夢でみたあの路地裏だった。頭上には切れかけの街灯がある。

麻衣「はあ、はあ、はあ」

海斗「ここなら少し…休める…だろ。」

海斗は壁にもたれかかっている。

麻衣「それより、あれは何？」

海斗「知るわけもない。当然「知るか。」と返された。

海斗「でも、殺意があった。あいつには。」

麻衣「妖怪…ぼくないし…」

怪物『おや、ずいぶん楽しそうだなあ。』

いつの間にかもう2mまで近づいていた。逃げたい、でも足が動かない？

海斗「おらああああ！」

海斗が体当たりをしかける。が、怪物はもろともせず、海斗を叩きつける。

海斗「ぐっ!？」

海斗は立ち上がり「麻衣、逃げる!」と叫び、またタックルをしかける。

…また地面に叩きつけられる。

海斗!？止めて、止めて、もうやめて!

海斗が死ぬなんて…

麻衣「止めて!！」

怪物『うるさいなあ…楽しませてよ?君たちはテラのために死ななきゃならないんだよ?おとなしくしてよ。』

テラ…？何それ？

一瞬気を取られた、そのとき、

怪物の左手は私の首をつかみ締め上げている。

麻衣「あつ…あつ…」

息苦しい…死んじやうの？私。

海斗「おおおおお！」

海斗がまたタツクルしようと走ってきたが、怪物は右手でかるく払い、海斗は地面に屈した。

海斗？なんで地面に倒れてるの？なんで立てないの？なんで？なんで？

麻衣「あつ…」

私のせいだ…私を助けようとして、海斗はボロボロになったんだ…
私が…私が…

怪物『ふつ…君たちは面白い。だが、ここまで…ぐつ！？』

突如怪物はくるしそうになる。

タンつと大きな音がした、また怪物が苦しむ。左手も私から離れた。私からは力無く倒れ、音のした方を見る。

タツタツタツタツ…

ピタツと四つの足が止まる。

右側には青を基調としたまるでロボットみたいな装甲をした足二本。左側には黒を基調としたスタイリッシュな模様をした足二本。

それぞれ形状は違うがベルトのようなものがをしてある。上半身は見えないが、2人はこちらをみているようだ。

怪物『なつ…かめん…らいだー…』

え！？仮面ライダー！？

第二話 高みを目指せ(前書き)

ツバサ「ツバサと」

ダイキ「…ダイキの…」

ツバダイ「…あらずじ劇場！」

ツバサ「いえいつ！　　〇　〇　〇　　」

ダイキ「ムダにテンション高いな。」

ツバサ「だって僕たち初登場ですよ？」

ダイキ「お前は一話からちゃっかりでたじゃないか。」

ツバサ「てへっ(#^.^#)」

ダイキ「俺たちが誰か気になる読者は早速本編をチェックしてくれ。」

ツバサ「…ダイキは『大人の都合』で今回で無いけどね。(^^)」

大智「…お前らな…あらずじをしっかり言えよ？」　2人にゲンコツ

ツバサ「すいませんでしたあ…。あらずじとしては、海斗さんと麻衣さんが蝶っぽい怪物に襲われました…」

ダイキ「…んで…闇の中から現れた2人とわ一体…ってとこだな。」

大智「それでは、仮面ライダーBEST、スタートだ」

第二話 高みを目指せ

怪物『なっ…かめん…らいだー』

麻衣「え…!？」

仮面ライダー?そんなわけない。

仮面ライダーはTVの世界のもの。この世界に存在するはずが無い。けどいま目の前にいる2人は仮面ライダーそっくり…いや、そのもの。しかも右側のライダー?は幼い頃よく大智の家で三人でみた仮面ライダーG3に酷似しているように見える。

黒のライダー?「麻衣、伏せろ!」

え!?今、麻衣って???

一瞬疑問に思ったがすぐさま伏せた。

『P i P i』

甲高い電子音が聴こえる。すると青のライダーが連続発砲していた。全弾怪物に命中。

怪物は軽く吹き飛ばされていた。

すると黒のライダーと青のライダーが私の前にたった。「アイツは引き受ける」などの声が聞こえた。なにやら打ち合わせをしているみたい。すると怪物が立ち上がり、突進してくる。すると黒のライダーが走り出し、そのまま肉弾戦に。その間に青のライダーが海斗を救出し、私のもとに連れて来て「もう少しご辛抱下さい。」といつてから私達に背を向け、怪物に短銃みたいなもので発砲していた。

海斗「…ぐっ…麻衣…大丈夫か？」

麻衣「海斗！？うん、私は大丈夫！海斗は？」

海斗「うーん…軽い打ち身と脚に少しだけ切り傷が…ってとこだ。大丈夫。」

麻衣「良かった…」

ホントに良かった…海斗が…無事で…

海斗「…そういえば、あれは…？仮面ライダーなのか？！」

あ…流石だけ子供のまま成長したやつだ。仮面ライダーかもしれない2人にはしゃいでいる。

海斗「…あれ？でも…仮面ライダーがこの世界に存在する…のか？」
麻衣「分からない。でも、今確かに仮面ライダーかもしれない2人が私達を助けてくれている…。」

海斗「うん…」

ふと視線をあちらにむける。

黒のライダー「はあっ！」

怪物『ぐあっ！？』

強烈な蹴りが入り、怪物がとんでいく。

黒のライダー「これで終いだ」

そういうと、腰にあった四角形の箱から数枚のカードが飛び出した。黒のライダーはその中からたった一枚を右手を振りかぶりながらと

り、その間、バックルとも言つべき中央の箱状のものを今まで黒のライダーから見て左側が下に下がり右側が上に上がった斜め状態だったのを横一直線にし、その箱の右上から左下にかけて入った割れ目にカードを通した。

『BEST Final Attack - Card Charge!』
電子音と同時に黒のライダーはバックルを左側が上右側が下の斜め状態にする。

『3・2・1』
バックルがカウントをする。

黒のライダー「ライダーキック…!!」
と叫んだあとバックルを左側が下右側が上になるようにする。

『GO!!』
電子音がそう響くと黒のライダーは高くジャンプしキックの体制にはいる。するとライダーの周りに黒のエネルギーみたいなものがまわりつきそれと共に怪物にキックする。

怪物『ぐあああああ!?!』

どがあああああん!!とあらかさまな爆発音が響く。

黒のライダーはこちらに歩いてくる。

黒のライダー「麻衣、海斗、大丈夫か?」

麻海「え…?!」

おもわず海斗と八毛る。そりゃそうだ。私達に仮面ライダーの友人なんていないはず。すると黒のライダーはバックルを横一直線に戻しバックルをとる、変身解除をしたのだ。

麻衣「え…?!」

海斗「マジ?!」

そこにいたのは…

大智「大丈夫そうだな。」
クスリと笑う大智がいた。

麻海「ええええええ！？」

??「ははっ！！当然の反応ですね！面白いくらいに」

青のライダーの方もいつの間にか変身解除をしたようだ。が、その顔に見覚えは無かった。

大智「紹介する。コイツは俺のサポートロボット、ツバサだ。」
ツバサ「ツバサです。(^^)」

微笑みながら握手を要求するツバサ。私、海斗の順で握手するが、肌触り、温もりは人間だと私の脳は思った。けどどさっき大智はサポートロボットだと言った。ロボット…？この人が？

海斗「…本当に、ロボットなのか？」

大智「俺に人を雇える金があるか？」

いや、大智はたしか父親の財産を全て継いだはず。大智のお父さんはその道では有名な技術者で、数多くの発明をし、特許を得た人。お金に困ることはあまりないはず。人一人くらい雇っても支障ないはず。

ツバサ「どうでしょう？僕も信じられていないようですし。大智さん。あそこに彼らを招くと言っつのは。」

大智「そうだな。少なからず海斗達は知っておくべきかもな、色々。」

麻衣「え?!」

海斗「あそこってどこ!？」

大智「とりあえず、お前ら飯まだだろ？今日は俺ん家くるってことにして親に電話しといたらいんじゃないか？夜遅いし、今更帰ってもとくに麻衣なんか怒られるだろうから、泊まって行ったほうがいいだろうし。」

幸いウチは友人の家で泊まるとなっても反対されないし、夜遅く帰ると待ち受けるお叱りも無くなる。だから大智の提案はけっこうメリットがあるのだ。

だから大智の言うことに従うことにした。途中で、気になる箇所があったが…

麻衣「じゃ、泊めてもらおうか」

海斗「そうだね。」

そついいながら私達は親に連絡する。

麻衣「もしもし？お母さん？私大智に泊めさせてもらうから。」

母「大智くん家？いいわよ。夕飯は？」

麻衣「今からだよ。」

母「失礼のないようにね」

麻衣「はい。じゃね。」

ケータイを切る。

そして「なら、行くか。」と出発。私は大智の後ろ。海斗はツバサさんの後ろ。

途中、「カフェくりいむ」に寄って、海斗は自分のバイクに乗り換え三台のバイクで夜道を走る。

この日から私達の運命の歯車は少しずつ加速していった。

第三話 秘密の扉（前書き）

ツバサ「ツバサと〜」

大智「高見大智と」

海斗「一之瀬海斗の〜」

大智「あらすじ…」

ツバサ「さあ、お前の罪を数えろ！コーナー！！」

大智「ちがあああああうー！！」

ツバサ「まず、大智は…」

海斗「俺が苦戦してた（？）のにカツコ良く登場しすぎ！」

ツバサ「一人でカツコ良く敵倒し過ぎ！」

海斗「何故か颯爽と現れて、颯爽と学校行き過ぎ！」

ツバサ「なんか」

大智「お前らが罪を数えろおおおおお！！！！」

ツバサ「殴られちゃった

海斗「上に同じく

大智「あらすじは…海斗と麻衣を襲った怪物を、黒のライダー？と青のライダー？が倒した。」

海斗「その黒のライダー？はなんと他でも無い大智だった！」

ツバサ「そしてなりゆきで海斗さんと麻衣さんは僕と大智さんと一緒…」

大智「さあ、スタートだ。」

第三話 秘密の扉

海斗の目

「つたく、大変な目にあつた…ついてねえなあ…
そう思いながらバイクを走らせていた。」

「…俺は麻衣を助けられ無かつた。」

「それどころか麻衣までアイツに殺されかける目にあつた。
大智がこなかつたら、俺は大切な人を失つていた。」

海斗「…」

「大切な人？いや、麻衣は麻衣だ。幼なじみで、幼い時から俺は振り回されてた。そんな麻衣が大切な人？いや、友人としては大切だと思つてる。だけど…」

ツバサ「どうしたんです？海斗さん。」

海斗「あ、いや…なんでも…」

並走していたツバサがクスリと笑う

ツバサ「…麻衣さんのことですか？」

海斗「!？」

おもわずツバサの顔を見てしまう。

ツバサ「危ないです、前向いて運転して下さい。」

海斗「あ、ああ。」

ツバサ「…凶星ですね？」

海斗「…」

ツバサは不敵な笑みを浮かべる。
俺は…麻衣が……？

~~~~~

麻衣の目

ついたのは…

麻海「山じゃん!?」

今いる場所。それは渚沙市の中央にある浜音山の中腹だった。ちなみに私達の家からチャリで十五分のところだ。

大智はただ私達の驚く様子を見て笑っている。

大智「まだ驚くなよ？」

大智は山肌のところにある機械に暗証番号をいれる。すると、そこまで山肌だったところ…大体横1m縦2mが開き、近未来的な通路が現れたのである。

麻海「……」

もはや啞然とするしかない。

中に入っていく。バイクも一緒に入る。すると目の前のドアがあいて更に中に入っていく。

大智「俺の研究室、TAKAMILABによっこそ！」

—————

入って啞然としていた私達を最初に迎えてくれたのはとつてもキレイな女の人だった。ちなみに、私は自分は普通だとおもっている。海斗は…小野寺ユウスケみたいな感じ。なかなかカッコイイ。大智

はモテるな〜って感じ。ツバサは長身。でも優しいってイメージのイケメン。

私達は長机の左側の2人掛けソファに2人で座った。

??「お茶です」

麻衣「あ、どうも。」

海斗「あざっす。」

女の人は私達と向かいの席に座る。その隣にツバサ。大智は私の斜め左、つまり全体を見渡せる位置にいる。

エリカ「私はエリカと言います。私もツバサとおなじサポートロボットなんですよ。」

ツバサ「あとあそこにいるダイキもサポートロボットです。ここに普段いるのはこの三人です。大智さんは学校があるので。」

奥にワイルド系イケメンがいた。あれもロボットらしい…ロボットだらけだ。しかも全員限りなく人間に近い。

麻衣「誰がなんのためにこんな設備、ロボットを？」

大智「今から説明しよう。分からない点もあるだろうが、とりあえず聞いてくれ。」

大智「超古代の話だ。人々は「楽」を求めていた。そして、人々は研究を始めた。長い時間がかかったが、当時のシャーマン達などが地球上の様々な物を「記憶」というものにして、そこからレジエントと言う生命体を作り上げた。レジエント達のお陰で人々は平和に楽に生活ができた。」

ツバサ「ですが、ある時、レジエント達の中から「私達はこのまま自堕落な人間に尽くさなければいけないのか」と考える者が出て来ました。すると事態は急変。レジエント達の一部が闇の力を持ったカオスとなり人々を襲いかかりました。人々は数多くの犠牲を出しながらカオス達を封印し、残りのレジエント達と共に遺跡に眠らせました。」

大智「…しかし、カオス達は封印を解くことに成功した。これが今から丁度1002年前の事らしい。当時の人々は驚いた。多くの人が死んだ。天皇は慌て陰陽師達に退治を命令した。陰陽師達はまず、レジェンドをカードに封印し、次にこれ…BESTバツクルを作った。そして、「一番の記憶」が入ったBESTカードで変身した。仮面ライダーBESTの誕生だ。」

エリカ「BESTの活躍と同時期に陰陽師によって作られたもう一人のライダーの力によってカオス達は封印し直されました。しかし、その封印も完全で無かったのです。そしてついに2010年、カオスは復活しました。」

大智「しかし俺の親父は2007年、趣味の遺跡巡りでそれを知った。2010年に大惨事がおこる。親父は必死に政府に訴えたが聴き入れられず、ついに一人でここに閉じ籠ってしまった。仕方なく俺は母さんと引越した。」

だけど中3のとき、親父に呼び出された。親父はなんと俺が引越してからツバサ達ロボットと仮面ライダーアギトに出て来たGXを手本にして仮面ライダーG5を作り上げていた。そして、俺にBESTバツクルとカードの束とカードケースを渡してきた。多分親父は研究に没頭するあまり病に蝕まれていたと思う。俺は親父に一通り教わった。」

そして、カオスは復活した。」

最初、カオスと接触した時、俺はこの力を生かせず負けてしまう。」

その時、親父が楯となって殺された。」

ツバサ「その後、僕達は人知れず、カオス達の脅威と戦っているんです。」

…はつきり言って100%理解出来なかった。」

でもとりあえず分かったのはここはどうやら世界的に有名な科学技術者高見誠司…大智の父さんが作った事。このロボット達も含め…だ。」

そしてひょんなことから高見誠司はカオスとかいう怪物の復活をし  
り、できる限りの対応策を作った事。

そして、大智に託した事。

大智が仮面ライダーBESTになったこと。

海斗はそれを知ってか知らずか大智に質問していた。

海斗「じゃ、さっきのは何人かいるカオスってやつの人？」

大智「違う。あれはサイラ。カオスの下っ端の様なもんだ。サイラ  
もなんらかの「記憶」によって構築されているみたいだ。」

麻衣「なんでカオス達は人を殺すの？」

ツバサ「どうやら彼らはテラの再構成のために人類消滅を行って  
いるそうです。」

そういえばあのサイラもそんな事を言っていた様な…

海斗「テラ…？」

ツバサ「テラとは地球のことですよ。」

大智「地球温暖化、オゾン破壊、生態系の破壊、動植物の消滅。人  
類が生まれてから様々な「記憶」が滅び、今なお滅びていつている。  
だからカオス達は邪魔な人類を消し、新たな地球を作ろうとしてい  
るんだ。「記憶」を守る為に。」

… 人類の愚かさが招いたこと…

その愚かさの為私達は消滅しなくてはならないの…？

…

沈黙が続く… 重い… 重い沈黙が…

するとおもむろに大智が口を開いた。

大智「だが…俺達人類にはまだやるべき事があるはずだ。人類が出来る今からでも遅く無い、地球を救う手段はあるはずだ。」

一度一呼吸おいたあと声を震わせながら続けた。

大智「あと…あと、救える命を…傍観してしまって…カンタンに奪われるなんか…もう…もう絶対二度とイヤだから…そう、親父と約束したから…」

大智の頬に一粒の涙が伝った。

そして、無理に笑いながら、

大智「だから、俺は、最後まで戦ってやる。あいつらと。」

そう、宣言した。



#### 第四話 海斗、挑戦（前書き）

エリカ「エリカと」

大智「…高見大智と…」

海斗「一之瀬海斗の」

大智「あらす…」

エリ海「門矢士みたいに大体分かったらオツケイあらすじ!!」

大智「ちがっ……うくも無い!？」

エリカ「前回、やっと全初期設定主要キャラが登場しました。」

海斗「で、なんか大智の研究室にいつて色々な説明を受けました。」

エリカ「正直長かったでしょ？」

海斗「うん…長過ぎ。」

ツバサ「あと…海斗の心情が少し出ましたよ（ボソッ）」

海斗「なんかいった？」

ツバサ「いえ。」

大智「って！俺の出番は!？」

ツバサ「じゃ、スタートです。」

大智「っておい！俺のセリフ!!」

## 第四話 海斗、挑戦

<海斗の目>

話の後、俺達は夕食を食べた。そして、俺と麻衣はそれぞれ個別に部屋を借りた。

「ただ俺はツバサの部屋にいった。」

ツバサ「で、また質問ですか？」

海斗「いや、違う……」

ツバサはオフィスにありそうな回転できる椅子に、俺はベットに腰掛けた。

ちなみにこのベットは特別製で、ここで充電が出来るらしい。

ツバサ「じゃ、なんですか？」

海斗「いや……その……」

ツバサは意地悪く笑ってこう言った。

ツバサ「もしかして……麻衣さんの事？」

海斗「ちがっ!?!」

思わず立ち上がってしまった。

ツバサ「動揺してますね。とりあえず座って下さい。」

素直に座る。

ツバサ「で、なんですか？」

海斗「……G5になりたいんだ……」

ツバサ「なるほど、さっき麻衣さんを守れなかったから今度は守りたい……と？」

ツバサはまた意地悪く笑った。

海斗「え!?!?ちがっ……う?」

ツバサ「ふふっ……あなたはわかりやすい人ですね。でも、面白いですね。分かりました、大智さんに言ってみましょう。」

海斗「ほんとか!?!」

ツバサはドアを開け廊下にでる。俺もその後ろに続き大智の部屋に

行く。

-----

コンコン

大智「どうした？」

大智が顔を出す。そして俺達の顔を見て「やっぱりな」と言っている通してくれた。

俺達はソファに座り、大智はベットにあぐらをかいた。

大智「で、用件は…海斗がG5になりたいってことだろ？」

海斗「なんで分かった!？」

大智「正義感のつよい海斗のことだ。多分麻衣を守れなくて力を欲するに違いないと思っていた。」

ツバサ「なら話が早いです、許可を頂けますか？」

大智「ああ、勿論だ…だけど、お前、G5使えるか…？」

ツバ海「…え…!？」

大智「だから、海斗がああG5システムを使いこなせるか？」

ツバ海「…ええ!？」

ツバサも驚いている。ツバサでさえ知らない事がG5にあるのか？

大智「あのG5システムなんだが…今まで言っていなかったんだが、人間が使う時G5システムが拒絶する事があるんだ。そのせいで俺は勿論、親父も変身出来なかった。」

だから大智の親父さんは生身だったんだ…

そしてカオスに…

大智「かくゆうBESTバツクルも拒絶反応が出る事が古文書に書かれてるがな。」

ツバサ「で…海斗さんは使えるんですか？」

大智「どうなんだろう…やって見ない限りには…やってみる？」

海斗「勿論！」

強く宣言した。

—————

シュミレーションルーム1と書かれたドアを推す。そして中に入り、バツクルを見直す。これが…G5…。

大智「いいか？使い方はさっき説明した通りだ。」

大智とツバサはガラスの向こうのシュミレーション補助ルーム1にいる。

ちなみにやり取りはマイクとスピーカーによって出来る仕組みになっている。

ツバサ「出来ます…かね？」

大智「そう祈るのみだ…」

シュミレーションルームに入る前、ツバサにみっちり教えてもらった。

まずバツクルを腰の部分にあてる。するとベルトが勝手に腰に巻きついた。あとはバツクルの数字入力キーを間違えないように…5・0・0…しっかり押した。入力時にP i P i P iと電子音が響く。すると変身待機音となる。

海斗「変身!!」

Enterキーを押す。

本来ならここでG5の各パーツが転送されるはず。だが…

海斗「ぐあ!?!」

壁に打ちつけられる。

シミュレーションルームはそんなに狭く無い。っていうかかなり広い。そんなところの中央から後ろの壁まで吹っ飛ばされた。体に激痛が走る。

大智「どうやら…拒絶されたみたいだな。」

いつの間にか大智が来てバツクルを俺から外した。

海斗「…もう…いつ…かいだけ…させてくれツ…!」

大智「…ただでさえお前はサイラにやられてるんだ。今日は寝ろ。もう10時半だ。」

海斗「…させてくれ…」

大智「ダメだ。いまやったら最悪死ぬかもしれん。そうだったら守れるモノも守れないぞ。」

海斗「…ツ!!」

俺は渋々大智のいうことを受け入れた。

俺はツバサに肩を借りながら部屋に戻った。「大智さんの言った通り、今日は寝て下さい。」と言われ俺はベットにのった。

今日一日ほんと色々あった。

すぐ眠りにつく事が出来た。

海斗「……ま……い……」

男「くそっあいつめ……あいつめえ……」

あいつさえいなければ……！

??『ム力つく奴がいるのか？』

男「！？だれだ……！」

??『だれ……そうだな、お前みたいなやつを救う神だ。』

神？そんなのが本当にいたのか？でも、神なら……！！

男「神！？なら、あいつ、東真を殺してくれ……！」

??『分かった、引き受けよう。』

神？は男に真つ黒なカードをぶつける。

するとカードからオオカミのサイラが表れた。

男「うっ……！？うああ……！」

??『さあ、こいつに命令しろ、そしたらその通りの奴を殺す。』

男「えっ……？そうなのか……？なら……東真を殺せえええええ……！！」

??『ふふふふふ』

## 第五話

### ツバサ、自重して！！（前書き）

ツバサ「ツバサと〜」

海斗「一之瀬海斗の〜」

ツバサ「最近このコーナーで大智が激しく突っ込んでるよね？の会！〜」

大智「お前らのせいだろ！！！！」

ツバサ「あと僕達このコーナーにすぎなんですよ。」

海斗「本当です、本当です。仮面ライダーBESTが完結する前に俺達死ぬんじゃないですか？過労死で〜」

ツバサ「僕はロボットなんで、スクラップですかね？」

海斗「そうなりますかね？しかし困りましたね。佐原麻衣氏なんて一度も出てないですよ？」

ツバサ「じゃ、次回佐原麻衣氏とエリカ氏にでもやって頂きましょう。」

海斗「ですね〜。あ、知ってます？大智って〜」

大智「いい加減あらすじをせええ！！」 二人にゲンコツ

注）大智は普通標準語ですが、たまに関西弁になります。母親が関西人なんで。

ツバサ「…ロボット殴って…故障したらどうするんですか…？」

頭をおさえる

海斗「…もうしません…おとん…」 上に同じく

大智「誰が父親だ。」

ツバサ「…大智」

大智「…」 殺気

ツバサ「ぜっぜっ前回の三つの出来事！」ブルブル

海斗「ひっひとつ！俺が仮面ライダーG5になりたがる！」ガク

ガク

ツバサ「ふっふたっ！海斗がG5システムに拒絶される！」ガク

ガクブルブル

海斗「みっみっみっみっ！」ガクガクガクガクガクガクガクガク

ガ（ry）

大智「みっつ。ある男に忍び寄る何かがある男の負の感情からウル  
フサイラを作る」

ツバサ「そっそれではスタートです！」



## 第五話 ツバサ、自重して!!

麻衣の目

ピピピピピピピピピピ

目覚まし時計の音で起きる。

あれ？私の部屋じゃ無い。どこ？

麻衣「あ、そっか…」

ここは…TAKAMILABだけ？大智の研究所だね…確か。

コンコンッ

誰かがドアをノックする

麻衣「どうぞ。」

ドアが開く、そこにいたのは、ワイルド系イケメンなロボット、ダイキだ。

…ただ、ピンクのエプロンをしているが…

ダイキ「そろそろ朝食の…」

麻衣「ププッ！」

ダイキ「何故笑う!?!」

いや、笑うでしょ。

私はエプロンを指差した。

ダイキ「あ、ああ、コレか。他のMYエプロンが全部洗濯中なんだ。変か？」

変とかいうレベルじゃ無いです…

っていうかMYエプロンなんだ…

ダイキ「それより朝食が出来たから身支度出来たらきてくれ。じゃ。

」

麻衣「はい！」

朝食を取るため食堂に向かう。

…この研究所人数少ないのにどんだけ広いんだろ…

食堂に来て見るとエリカがいた。

麻衣「おはようございます。」

エリカ「あ、おはようございます。」

エリカの服装は夏らしいしま状のタンクトップにデニムだ。

エリカ「ぐっすり眠れました？」

麻衣「はい。なかなか。」

エリカ「それは良かった。あ、このルールとして基本全員でご飯を食べる事になってますから待ってて下さいね。」

こちら現場の佐原です。

さて、みなさん、どう思いますか？

明らか人間同士の会話としか思えないんですが、エリカ達はロボットです。

某二十二世紀からきたタヌキロボットが人間と同じものを食べているせいでロボットが、人間の食べ物を食べるのに抵抗が無い方もいらっしゃると思うのですが、果たしてロボットは人間の食べ物をエネルギーとしているのでしょうか？聞いてみたいと思います！

麻衣「…といますか…昨日も思ったんですが…」

エリカ「はい？」

麻衣「ロボットって…人間が食べるものからエネルギーを得るんですか？」

エリカ「あゝ、それですか。それは…」

??「僕がお答えしよう!」

そこには…

麻衣「…ツバサ…さん!？」

ツバサ「いえす」

なんと恐ろしく似合っているピチュウのパジャマを着たあの優しい系イケメンのツバサがいた。しかも超笑顔…

こっこちら現場の佐原です!!

緊急事態が起きました!!

ピカチュウが現れました!

ツバサ「……んで、これのおかげで…」

なんとピカチュウが説明しております!!

ツバサ「……と言うわけなんだよ」

麻衣「…ププツ」

海斗「あはははははは!!」

ツバサ「なっなんで笑うの!？」

終始満面の笑みで解説をしていたピチュウツバサにいつものまにか来た海斗もひーひー言いながら笑っている。  
っていうか笑うでしょ!!

エリカ「あんたのパジャマに笑ってるんじゃない？」  
ツバサ「え！？……」

……着替えてくる！！」

エリカ「マシなのに着替えてきなよ」

敬礼をビシリと決めたあとツバサは慌てたように食堂を飛び出した。  
それを見送る間も海斗はゲラゲラ言ってる……

ダイキ「あれ？ツバサは？」　ピンクエプロン装備

エリカ「お着替え」

ダイキ「なるほどな」

エリカ「あなたもあなたでなんで第一印象崩壊エプロン付けてるの？」

ダイキ「他三着洗濯中。」

エリカ「……今までどこぞの天の道を往き総てを司る男やハーフボイルド探偵のイメージだったのに、どこぞの記憶喪失家政夫イメージがついちやうじゃない。」

ダイキ「フツ……どんなイメージを持たれようが、俺は俺だ。」

エリカ「……中身はどこぞの天の道を往き総てを司る男にちかいんだけどなあ……しかもダイキ、料理好きだし。」

大智「ふああああ……」

麻衣「あ！おはよ！」

海斗「おはよ、はははは……」

大智「ああ、おはよう。……海斗、何があった？」

麻衣「いや、実はね……」

ツバサ「僕、参上!!」

若干空気が凍る…

ツバサは電王でお決まりのポーズで立っている。

そして一同がツバサを見る。

確かに着替えて来た…きたんだが…

…そこにはやはり恐ろしく似合っているピ ユーのパジャマ?を着たツバサが立っていた。

ツバサ「着替えたよ…?」

麻海「あははははははははははははははは!!!!」

大智「…ナルホドな。」

ダイキ「…パジャマのままかよ…」

エリカ「…それあんまり変わってないんじゃないかな?」

大智「ツバサ…」

大ダイエリ「…自重しろ!!!!」



第六話 私のやる事（前書き）

麻衣「佐原麻衣と」

エリカ「エリカの」

麻エリ「『どきどき井戸端あらすじ会議！』」

ダイキ「『どきどき』ってなんだ!？」

ツバサ「あれ？最強のツッコミは？」

ダイキ「飽きれて外出。」

エリカ「麻衣ちゃんは彼氏とかいるの？」

麻衣「いないですう」

エリカ「え〜うっそ〜！麻衣ちゃん可愛いのに〜!」

麻衣「え!？可愛く無いですよお」

エリカ「可愛いつてえ〜!!」

麻衣「可愛く無いですつてえ〜!」

ダイキ「…あのキャピキャピ止めてくれ…」

ツバサ「…僕にはムリ。不可能です。」

海斗「…俺も…ムリ」

大智「…はやくあらすじ言え。」

海斗「大智おかえり」

エリカ「あらすじらしいあらすじなんて無いじゃないですか。前回」

麻衣「そうですよ!!作者がいけないんです!」

——本当に申し訳ない…ツバサが自重しないから…

海斗「あ、天の声（作者）が謝ってる。」

ツバサ「え…僕のせいなの?」

全員「」「うん、お前のせいだ」「」

「今回はちゃんと話進めたいと思います。では、仮面ライダー  
EST、スタートです。」





来てみるとエリカは一つのパソコンのに座りサイラの位置を特定していた。

その間にダイキ、大智、ツバサ、海斗と集まる。

エリカ「香月駅付近にサイラがいます！」

ツバサ「G5は…僕が装着します」

慌ただしくみんな動いている。私達はぼーっと突っ立っているだけだ。

すると…

海斗「俺に手伝えることってあるか？どんな些細なことでもいい、手伝いたいんだ！」

全員の動きが止まる…そして、

ツバサ「…どうでしょう、大智さん？先ほどまで海斗とG5の練習をしていたんですが、彼、G-51ショットは扱えるみたいなんです。ここは彼に牽制をやってもらいませんか？」

大智「…」

海斗「やらしてくれ！黙って見ていたく無いんだ！」

ダイキ「素人には危険だ！やらないほうが…」

大智「…海斗、頼んだ」

空気が凍る…

海斗「え？いいの？」

大智「勿論だ。しかも海斗の黙って見ていたく無いって言葉…俺も同じ気持ちだからな！」

海斗「ありがとう！」

麻衣「私は…」

大智「麻衣はここに残ってくれないか？」

麻衣「う、うん」

エリカ「みんなが帰ってくるのをコーヒーでも作って待ちましょう、  
ね？」

麻衣「そうですね」

というわけで大智、ツバサ、海斗が行く事になった。

私はただそれを見送っただけだ。

## 第七話 出会いと謎（前書き）

ツバサ「BESTっていう名前の意味は取り込まれた記憶が1番だからというのと、あともう一つ理由があるんですよね」

海斗「変身シーンがあれば分かるんだけど…」

大智「……orz」 今までの変身シーン無しに落ち込み

ツバ海「あれじゃ変身出来ない!」「」

天の声「おい、大智、変身シーン今回あるぞ」

大智「いやっふうふう!!」 復活

エリカ「とりあえず、軽くあらすじをいうとサイラがでたため大智、

ツバサ、海斗が行きました」

ツバサ「それでは、どうぞ!」

## 第七話 出会いと謎

大智の目

昨日、あれだけ止めたのに、また今朝やっていたみたいだな、海斗。

海斗「…？どうした？」

大智「いや？」

ツバサ「前向いて運転して下さい！」

…とりあえず、海斗の正義感に任せてみるか…

—————

狼サイラ『東真…お前は死なねばならぬ…』

東真「うつつわあああああ！？」

あのサイラの目的は東真という人の死か…？

とりあえず、止めるしか無いな。

あらかた人は逃げているみたいだ…

バイクで弾き飛ばしても大丈夫だな。

大智「おりゃ！」

狼サイラ『うぐっ！』

サイラはおそらく意外だったのだろう、たやすく吹き飛んだ。

ツバサ「狼…：…獣の力オスですね」

大智「だろっうな、とりあえず、行くぞ！」

そう言いながらバイクからBESTバツクルを取り出す。それを腰の前にかざすとベルトが巻き付けられる。

そしてベルトの右側のボックスから一枚のカードが飛び出てくる。

それを右腕を大振りしながらとり顔の横までカードを持ってくる

大智「変身！」

BESTカードをスラッシュさせる。

そしてバツクルを俺から見て左側がしたになるように斜めに倒す。

BESTCard...Change!

音声の後、黒いエネルギーの塊の様なものが集まりそれが消える時には黒を基調としたスタイリッシュな仮面ライダーBESTに変身する。

右手人差し指をたて、天を差したあとサイラに指をさす。

BEST「BEST...つまり1番。俺は...1番となる者だ!」

狼サイラ『ふざけるのもここまでにしろ、お前達はいつまで邪魔をする!』

BEST「お前らが人間を殺さなくなるまでだ。人は間違いを犯す、だが、その間違いを挽回させる力を持っている。その力を信じられないのか!?」

??「ああ、無理だな」

声のした方を見る。

??「はっ」

BEST「ぐあ!?!」

海斗「大智!」

G5「はあっ!」

G5がG-53ランチャーで攻撃して相手が少し怯んだため距離をとり見てみると...

BEST「...!!お前は...!」

ビースト「ああ、ビーストだ」

海斗「あいつは...?」

ツバサ「獣のカオス、ビースト。大智の親父さんを殺した超本人です」

ビースト「お前ら人間は愚かだ、自分達はいざとなればスゴイ力を

發揮するなどを信じきっている。だが、お前らは一度でもその力と  
言うものを發揮できたか？今まで破壊しかしていないだろ？」

BEST「そっそんなことは…無い」

ビースト「ほう…自分達の利益のみ考え、ほかの静かに暮らしてい  
る生物を殺してきたお前らが、さらに事もあるうにお前達も含めた  
あらゆる記憶を作ってきた地球でさえも破壊しようとしているお前  
らが何をした？」

BEST「ぐっ…だが、人類は記憶を復活させるべく…」

ビースト「ほかの動物を実験台にし、さらにお前らが勝手に作っ  
たにすぎない遺伝情報を使って蘇らせようとしている…それが記憶  
の復活か？違う…まったく新しい、お前らに都合上のいい記憶の創  
造だ！」

BEST「…なっ…！？」

ビースト「しかも今では毎日の様に互いに互いの記憶を消しあつて  
るでは無いか！街には猛進する鉄の塊がうようよいる、海にも空に  
もだ！こんな人間がもたらすのは破壊と破滅のみ！」

BEST「ぐっ…」

ビースト「我々がしている事こそ正義。お前らは悪なのだ！」

BEST「ぐああっ！」

いきなり近づいてきたビーストが俺を蹴り飛ばし踏みつける。  
そして足をあげ振りかぶった。  
やられる…

バンバンバンバン！！

ビースト「ぐっ…」

海斗「止める！」

海斗はなおも撃つ、少々危なっかしいながらもけっこうあたっていきる。

俺は前転などでもう一度で距離をとる。

ビースト「ぐっ…何かと思えば変身も出来ないただの人…くっ…こいつは!？」

海斗「はあっ！」

ビースト「ぐっぐあっ!？ちっ、似てる…かなり似ている…あいつの子孫か!？だが、変身しないあたり今は脅威で無いな、はあっ!」

俺はビーストの前にたち、キックをかました。

BEST「おりゃ！」

ビースト「ぐっ!？くそ、体制が悪すぎる…はっ」

そういうとビーストは消えていた。狼サイラもだ。

あいつらが逃げたあと、あいつが言った言葉を思い返した…

あいつの子孫か!？

変身しないあたり今は脅威で無いな

海斗に何かあるのだろうか…？

何か、恐れる様な力が…



## 第八話海斗とヒラメキと顔（前書き）

ツバサ「前回のあらすじ」

大智「あれ？今回普通だ」

ツバサ「とりあえず、ウルフサイラと戦闘中あらわれたカオスの一人、ビーストと交戦：かとおもわれましたが論破されやられる仮面ライダーBESTこと高見大智を一之瀬海斗が助けました」

海斗「普通にあらすじしたね」

大智「今回はマトモに前振りが…」

ツバサ「だけど、あの時サイラと交戦してた僕の描写無しってどういうこと!？」 天の声の首締め

天の声「あぐっ!?!あえぐひあべ!?!」

大智「おい、ヤメロオオ!?!?」

ツバサ「アイツかなりすばしっこかったですよ!?!かなりいい戦闘描写でしたよ!?!なんで?なんで!?!」

天の声「うぐっ……」 ぐったり

海斗「トドメ入ったああ!?!?」

ダイキ「…若干波乱な感じだが、きにせずどうぞ」

麻衣「気にするよ!?!」

エリカ（と、いうか、ツバサのキャラが本編、あらすじ、スピントフで変わり過ぎてるコトには誰もつつこまないの?）

## 第八話海斗とヒラメキと顔

### 大智の目

「あいつの子孫か!？」

「変身しないあたり今は脅威で無いな」

ビーストが言ったあの言葉…なんなんだ？

もしかして…

大智は依然考えを巡らしていた。

ツバサ「…あのう…大智さん、一応あいつらがどこに行くか、追わせた方が…」

大智「ん？ああ、そうだったな」

ツバサの一声で憶測の世界から引きずり出される。

俺はメモリーボックス…つまりカードケースの事だ。ここにBESTカードやらが入っているんだが、その中から2枚のフチが赤いカードを取り出した。

こいつはBESTカード等みたいに变身や必殺技を放つカードじゃなく、サイラ達の記憶と同レベルの記憶が封印されている。サイラも倒したら記憶に戻るからカードに封印し無いと十五分後に記憶が消滅し、その種族が、消えてしまうんだが…

ま、その話はまた今度としよう。どうせなら海斗と麻衣にも話した

いから。

この赤いカードに封印されているのはスズメとメジロの記憶。こいつらも以前サイラだったのを封印した。密偵にはもってこいだ。…タカとかがいい？いや、あいつらデカイから…

大智「さあ、ヤツらのあとをつけてくれ」

二枚のカードを投げたらスズメとメジロの二体の式神が出てきて飛んで行った。

ふう…あとは…あ、海斗忘れてた。

大智「海斗、大丈夫か？」

海斗「…あ、ああ…：…あつ、そういえば、あいつ、東つて人に執着してたような…」

大智「…おそらく、その東つて人を妬む負の感情と狼の記憶であるサイラはできたんじゃないか？」

海斗「サイラは負の感情から生まれるのか？」

ツバサ「はい。憎み、妬みなどの人の負の感情や、破壊されたモノの気持ち、苦しむ動物、自然の気持ちなどと記憶が交わり生まれるんです」

大智「サイラが生まれたら例えば特定のヤツを殺すなどのミッションがある。それが終われば後はそのサイラの意のまま殺人を繰り返す…」

海斗「なら作った後すぐ殺人鬼つて方がいいんじゃないか？あいつらにとつて」

ツバサ「でも今までその様な事例はありませんでしたから出来無い

と考えた方が無難です」

大智「サイラを使わずに殺すカオスもいるが…どのサイラもカオスも何故か一定のルールに従って殺しているように思う」  
ツバサ「謎だらけなんです」

そう、謎だらけ。

あいつらの事は何がしたいのか分からない。

ただ、言える事は、ヤツらは人類を滅ぼし、生物の記憶を守る事。それだけだ。

――――

## 海斗の目

大智がさつきから考え事ばかりしている…いつ帰るのだろう…

あ、そういえば、仮面ライダーオーズの時は確か人の欲望からヤミ―が生まれるんだっただよな…もしかしたら東って人に何か尋ねてみたら…

海斗「ツバサ」

ツバサ「はい？」

海斗「サイラって負の感情から生まれるんでしょ？」

ツバサ「そうですね」

海斗「なら、その負の感情を無くしたら力を失うんじゃないかな？」

ツバサ「…なるほど、確かにそうかも…今まで考えてもみませんでしたよ！」

海斗「よし、東さんに何か心あたりを聞いてみますか？」

ツバサ「ですね」

さてと、と言いながらかる―くまわりを見渡す。

あ、さつきサイラに胸ぐら掴まれた人がその場で呆然と腰をついてる。

海斗「…あの人が東さん？」

ツバサ「ですかね？」

海斗「聞いてみよっか」

ゆっくりと近づく。

そこには三十代だろうか？立派なみなりのビジネスマンだった。

…何処かで見えた様な…？

海斗「すいません、東さんですか？」

東「はっはい…あのあなた方は？」

え！？…なんていえないのだろう…

高校生？なら話してもらえ無いだろうし、仮面ライダーって言った  
ら、余計たいへんな事になるかも…クウガの未確認生物四号みたいな  
な感じで…

しかし、この考えはものの二秒で無駄となる

ツバサ「…私共は内閣情報調査室より依頼を受けた高見研究所の者  
です」

海斗「は…？」

東「は…？」

ツバサ「だから私共は内閣官房内閣情報調査室から依頼を受けた者  
です！」

俺は東さんに聞こえない様にツバサに

海斗「なんだ？それ。そんな組織あるのか！？聞いた事ないぞ！」

ツバサ「実際にある組織です。たまに僕達の研究所に依頼に来ます

から」

海斗「だけど……」

ツバサ「いいから任せてください！」

東「あのう……どうされました？」

海斗「いついえ！何でも！」

ツバサ「なにせこの者、初めてなもので……」

東「そうですか……」

やばい！めっちゃ疑われてる……

そもそも聞いた事の無い組織なんだ、疑うのも当然だな……

東「その内閣なんとかっていう組織は、何なんでしょうか？」

ツバサ「内閣の直下の元、日本国の色々な事を調べる機関です」

東「そんな機関が存在するんですね……？」

ツバサ「疑うのもムリ無いかと思いますが、実際にあります。しかし彼らだけで解決出来無い問題などがあります。そういう場合は私共の様な者や、霊能力者などの民間組織に依頼するんです。今回もそういうワケで少々お話を御伺いしたいなと……」

東「……失礼、私にも仕事がありますので……」

ツバサ「ちよつちよつとだけでも……」

東「……失礼します」

ツバサ「あ、あ」

海斗「すいませんでした！ほら、ツバサさん！」

ツバサ「え！？」

俺は嫌がるツバサを無理矢理引き摺って離れた。東さんの視線が痛かった。

ツバサ「なんですか！？もう少しで……」

海斗「いや、ムリだつて…怪し過ぎるし…」

あんな悪徳商法みたいなもの、信じる人なんてほとんどいないって…  
それにしても…何処かであの人…

海斗「ん？」

目に止まったのは駅前のモニター。何故かNHKがずっと流れているやつだ。

大智「さてと、帰るか」

ツバサ「海斗さん、帰りますよ？」

海斗「…」

ツバサ「海斗さん？」

大智「…おい、海斗！」

海斗「…あああああああ！！？？」

そこには…

デカデカと東さん…っていつか東社長が出ていた。

大智「…ああ、確か、二十八歳でIT企業を起業、翌々年業界の業績格付け3位に昇りつめる若き天才…だっけ？」

海斗「あの東さんって…社長だったんだ…」

ツバサ「…敵が多そうですね…」

海斗「これは、話聞いても手掛かり無かったかな？」

大智「…何の話だ？」

海斗「帰りながら話すよ」

というコトで研究所に帰る事になった、それぞれにモヤモヤを抱えながら…

## 第八話海斗とヒラメキと顔（後書き）

海斗「…思ったんだ…」

大智「…何を？」

海斗「…ツバサ、なんであんなにブレるの？」

大智「…メタいが…昔はかなり真面目なツツコミ設定だったんだ…」

麻衣「…面影が無くなって…特にスピノフ…」

天の声「…だれか、ツバサを止めてください。出来るキャラを貸して頂きたいです…」

ツバサ「ヲイ」

天の声「ひい！」



## 第九話 記憶

これまでの仮面ライダーBESTは…

大智「もう絶対二度とイヤだから…そう、親父と約束したから…」

海斗「…G5になりたいんだ…。」

ツバサ「僕、参上!!」

麻衣「私はただそれを見送っただけだ」

ビースト「今まで破壊しかしていないだろ？」

海斗「なら、その負の感情を無くしたら力を失うんじゃないかな？」

総ての記憶の…総ての頂点となれ！

大智「…なんで今回カッコつけてみたんだ？」

海斗「というか、なんでムダにイケイドなんだ？」

門矢士「正直それ思った」

麻衣「何故ここに!？」

大智「更にムダに海斗だしな」

海斗「あとツバサのあのセリフ…ツバサがバカやったときのだよな

？」

麻衣「今まで見るとサイラに対してやったみたいだな…」

参照

<http://ncode.syosetu.com/n1916w/6/>

天の声「ちなみにこういうタイプのあらすじ、今後は大きな意味で  
の一回に一回出す予定です。あくまで予定ですが…」

ツバサ「じゃ、スタート」

全「「「ライ」」」

~~~~~

*現在、大智サイドでは海斗が東さんへの聞き込みを失敗したくらいです。

麻衣の目

麻衣「大智達遅いなあ…」

あれから私はエリカさんとコーヒーいれたり（ちなみに大智は砂糖
4個、海斗は砂糖無しが好き）またもや談笑してたりしていた。

エリカ「確かに今日は遅いですね…」

麻衣「いつもはもっと早いんですか？」

エリカ「ええ…今くらいにはコーヒーを飲み始めるくらいですね…」

麻衣「…そういえば…学校とかで、カフェテリアで大智と食事を
とるんですが…大智、甘党すぎですよね？」

エリカ「あゝ確かにそう思いますね…私たちはあんまりコーヒー
とか飲まないんですが…機械へのダメージ的な意味で」

麻衣「あー、食べ物類はOKでも、飲み物類はあまりとらない方がいいんですか？」

エリカ「水分量の問題なんですよね」

麻衣「なるほど」

また談笑がはじまる、すると不意にドアが開いた…入り口と反対側の。

ダイキ「…？」

麻衣「どうしたんですか？」

ダイキ「大智まだか？」

麻衣「まだですよ？」

エリカ「どうしたの？」

ダイキ「…いや、アップルタルトが出来たから、出来たてのうちに…と」

麻衣「…ホント料理好きですね」

ダイキ「大智の父さん、所長が料理ダメだったからな」

麻衣「なら何故その料理作る担当がエリカじゃ無いんです？」

エリカ「うーん…」

ダイキ「…作れるんだが、俺とこいつじゃつくられたのがエリカの方が早いから、エリカで出来なかった分をカバーした俺が1番上手い…と」

エリカ「ちなみに、ツバサがここの最初のロボットよ」

麻衣「…とすると、料理は…」

エリダイ「…かなり下手」

麻衣「…ですよね…」

ダイキ「うーん、とりあえず、保温しておくか…それとも冷すか…」

麻衣「コーヒー熱いですから…ぬくい方が温度差的に…でも冷えほ

うが好きです…」

ダイキ「なら冷やして来る」

麻衣「…ありがとうございます」

—————

麻衣「…まだかな…」

エリカ「もうそろそろだとおもいますけど…」

麻衣「コーヒーちょっと冷めちゃったですね…」

と、言っていたらまた不意にドアが開いた。入り口のドアが。

大智「ただいま」

ツバサ「たらいもー」

海斗「どこをどう変えたらそうなる!？」

エリ麻「おかえりー」

ダイキ（何時の間にか来た）「やっとか。てこずったのか？」

大智「ビーストが出て来やがって…大体そんなもんだ」

ダイキ「…倒せなかったみたいだな？サイラも、ビーストも」

大智「うるさい」

ダイキ「まあ、とりあえず、これでも食べる、疲れただろ」

海斗「ゴチです!」

ツバサ「いえーい」

エリカ「…食べてもあなた、味覚無いじゃない…」

ツバサ「それはいわない約束!」

—————

と言うワケで、皆でワイワイかこってティータイム。

海斗「社長だったら恨みも相当あるんだろうな……」

大智「でも、なかなか海斗の提案、いいと思う。…よし、ちょうどいい、サイラの話しようか」

麻衣「エリカさんから人間の負の感情とかと記憶が交わって出来るって聞いたけど……」

大智「うむ……」

すると大智はカードケースから何枚かカードを取り出した。

大智「これが、ベストカード。ここには『1番』の記憶のレジエンドが封印されている。これはベストアタックカード。ベストレジエンドの力が封印されている。これはリーフカード。『森林』の記憶のレジエンドが。こういうふうにしてそのレジエンド本体が封印されているのが変身出来るカード。そのレジエンドの力や技、効果が使えるのがまた別のカードとなってる。ま、こいつらは俺が実戦で使う」

海斗「…俺たち関係無いのかよ！」

大智「海斗は一応知ってた方がイイかもしれん……」

海斗「…？」

麻衣「で、こっちは？」

大智「もともとサイラみたいなレジエンド達よりもっと個別に分けられた記憶。メモリーだ。例えばこのタカが描かれたのはタカのメモリー。こっちはアカウミガメのメモリー……みたいにな」

海斗「…じゃあ、こいつらはサイラを作るくらいしか利用法が……」

大智「サイラにするのはカオスだけだ…まず、陰陽の血を持つ者はメモリーを式神として利用出来る」

……

麻衣「……………大智は？」

大智「使える…というか陰陽師、高 祥明…平安時代の仮面ライ
ダーBESTの子孫だ」

……

海麻「…」 啞然

ツバサ「絶叫は無いんですか？」 笑ながら

大智「信じられないのも分かるんだが…残念ながら本当なんだ」

麻衣「…だからBESTに変身出来るの？」

大智「多分な」

ならこれから大智は記憶の数だけ戦うことに…？大智だけが…？

麻衣「…私も…私も大智を手伝いたい…」

大智「…え？」

麻衣「…私も、大智を手伝いたいの…！」

第十話 未確認生命体（前書き）

大智「あらすじ…ま、会話シーン。以上」

海斗「いやいや、そうだけどさ！？もうちょっと面白おかしく…」

大智「はい、スタート」

海斗「きけよ！！」

第十話 未確認生命体

大智の目

麻衣「…私も…私も大智を手伝いたい…」

大智「…え？」

麻衣「…私も、大智を手伝いたいの!!」

麻衣…

大智「気持ちは嬉しいが…ムリだ。出来れば海斗も止めて欲しいくらいなんだ」

そう、ヤツらと戦うにはそれ相應の用意がいる…しかし、今あるバトルスーツはG5のみ…しかもG5は使用者がかなり限られる…その現状で…戦いの場にはムリだ。

麻衣「…お手伝いはなにも、実戦力だけ…って事じゃ無いでしょ？」

大智「…え？」

麻衣「だから、その式神…私も使えるかも」

大智「…え？」

麻衣「私、おばあちゃんから聞いた事あるんだけど、私の直系先祖は佐々 憲久って言う陰陽師だったらしいし…」

大智「佐々…」

ツバサ「あ、高 祥明の弟子が佐々だったはずです…」

大智「…まさか…」

俺は数枚のカードをだす。先代のBESTが封印したと思われる記

憶が入っている。

大智「これを…」

そう言おうとした時だ。

突然警報がなった。

エリカ「報告します！場所は…AZMホールディングスのビル付近
！」

ツバサ「AZMホールディングスといえば…あの社長の…！」

大智「確実に狙って来たか…」

そっぴいなからバイクにのる。

大智「麻衣、ほらっ！」

そっぴいつてヘルメットを渡す

麻衣「…もしかして…」

大智「使えるかはわからないが、試す価値はある！ただし、ツバサ
の後ろで隠れておくこと！」

麻衣「うん！」

三台のバイクと四人がLABから飛びだした

~~~~~

女性「きゃあああああ…！」

狼サイラ「東はどこだ？東は！」

誰かが押したのか…消防の火災ベルが鳴り響くビル内部では混乱が

起きサイラは片っ端から人という人を捕まえては問いほり投げを繰り返していた。

――

## 原の目

警察官「原警部！未確認生命体第58号は現在ビル内部にいる模様です！」

原「啓介「至急SATに連絡せよ！」

警察官「ハッ！」

1年前から現れた未確認生命体：

我々警察はヤツらの前に何度も苦汁を飲まされている。

その為出来たのが未確認生命体対策班：俺がここにいるのもその対策班に属しているからだ。

しかし、ヤツらは暴れるだけ暴れて忽然といなくなるケースもある：そいつらは何処にいるのか：全くわからない

あと気になるのはこいつらができると必ず首を突っ込んでくる若者だ。ヤツが何か知っているのか…？

警察官「…ぶ！警部！」

原「どうした！？」

警察官「58号がビルから出て来ました！」

原「チッ！！SATは！？」

警察官「現在急行中とのことですよ！」

原「仕方ない、我らでやるぞ…！」

警察官「警部！未確認生命体第7号が現れました！その後ろではまたなんらかの機械が！」

原「またか!？」

未確認生命体第7号……未確認生命体が現れてほどなくしてから現れた他の未確認生命体とは異なるような生命体だ。その背後にはいつも何らかの機械……そう、例えるならロボットの様なヤツがいる。こいつらは何故か発生した未確認生命体と戦う……同士討ちかなにか？

警察官「報告します、謎の機械の背後に2人の男女が！」

原「ヤツ(=いつも首を突っ込んでくる若者)か!？」

警察官「違います！」

原「一体なんなんだ……!?とりあえず未確認生命体第58号を倒せ!7号は近づいてきたら撃て!くれぐれも人間にあてるな！」

警察官「ハッ！」

――

麻衣の目

バイクを走らせている途中大智は変身した。そして一枚のカードをくれた。白いキツネ?が描かれたカード、オレンジ色の淵があるカードだった。

BEST「警察が多いな……これじゃまともに交戦出来ない……」

G5(ツバサ)「とりあえずサイラを射撃しますか？」

BEST「さて、ツバサは現状待機」

G5「:分かりました守りを優先ですね」

ツバサはベルトに着いている0~9までの数字が書かれたボタンの内、055を押した。するとプラズマが現れ中から大きな盾が出てきた。G-05

BEST「とりあえずサイラを釣る…あ、麻衣はさつきも言ったとおりいざとなったら念を籠めて渡したカードをなげろ、海斗は…警察にお前の発砲を見られたら捕まるから、隙を見てそこに尻餅着いてる人を安全な場所へたのむ…」

麻衣「うっうん」

海斗「了解した！」

BEST「うん…ツバサ…くれぐれもこいつらを…頼んだぞ」

そう言うと仮面ライダーBESTはサイラに向かって走って行った。

タン、タン、タンとリズムが刻まれていく…

ダダダダッ！！！

銃声が響く

…警察はサイラもろとも大智に発砲していた…

第十話 未確認生命体（後書き）

新キャラ・原 啓介。野郎ですみません。

警察サイドはこの原のほか何人かいますが…

正直名前や性別も決めていない人が多いのでまた公開には時間がかかります。

十一枚目　　L E A F　　〈森林の記憶〉（前書き）

海斗「狼サイラ編最終話！いやあ…長かった…」

ツバサ「あと、前回は新キャラも出ましたよ！」

エリカ「新キャラ原警部…警察も事態を重く見ているみたいね…」

麻依「そして今回は…BESTの新フォームが…！」

ダイキ「…あらずじを言わないか、みんな？…まあ、俺が言つと、麻依や海斗をツバサに託してサイラに向って走って行く大智。しかし、待ち受けていたのは…警察隊の銃撃だった…」

大智「BEST…つまり1番！俺は…一番となる者だ！」

十一枚目      L E A F    〈森林の記憶〉

大智の目

ダダーン…

BEST「グッー!!」

体に痛みが走り、怯む。

左肩、左胸、右腕、右足…確実に着弾した。

BESTのスーツはそんなにやわじゃない…だが、警察隊が使っている銃はこれまでの対サイラのためか通常の装備を遥かに超える装備だ…

…狙いが少々ぶれても、弾丸一発で人間が軽く吹っ飛ぶくらいの銃。いくらBESTのスーツが強硬であっても衝撃はやはり強い…

BEST「くっ…仕方ない…か」

俺は一枚のカードを取り出した。

『LEAF』と書かれた緑色のカード…

俺はそれをバツクルにスラッシュした。

L E A F    C a r d

BEST「変身！」

そう言うが早くバツクルを斜めに倒す。

Change!

すると緑色のプラズマのようなエネルギーと地中から突き上げる様に生えてきた根が俺の体を包む。

BESTLF「はあっ!」

そう叫びながら右腕を刀の如く横に振り宙を切る。するとプラズマと根が弾け飛ぶ。しかし、その姿は今までの漆黒のスタイリッシュなBESTフォームでない。緑を基調とし所々銀のラインが入った色合い…そのフォルムは鎧を被ったかの様なスーツ。【森林の記憶】をもつリーフフォームだ。

姿が変わり…というか恐らく根が飛んできて慌てた警察隊もまた銃撃を開始し始めた。

しかし先程怯ませられた銃撃もこのスーツの前に全て無能力同然となる。

リーフフォームの大きな特徴、それはスピードを犠牲に防御力を上げること。

そして…右手に今握っている『フォレッツサーソード』という大剣。

だが今はこいつを使う時じゃない。

俺は大音声でサイラに言った。

BESTLF「東がいるこっちには絶対行かさん!」

それを聞いた警察隊は皆首を傾げる。



…つまり恐らく東社長はこのビルの上か警察が保護したのだろう。  
つまりハツタリだ。

現場はいっぺんに静まりかえる…ただし、嬉々とし始めたサイラを除いて。

狼サイラ「なんだと？」

獣の記憶に属するサイラ達の共通点。  
それは、身体能力が高いということと…

狼サイラ「東を殺す！」

アホであること。

予想通りこちらに走ってきた。  
俺はすぐさまバイクに跨り逃げる。

BEST LIF「ついてこれるもんならついて来い！」  
狼サイラ「ノロマめ！待てえ！」

バイクで走りながら不安そうにみる麻依と海斗を見た。そして少し  
頷いてからバイクを飛ばした。

――

狼サイラ「…ここか…」

渚沙市の真ん中を流れる千渡川。

ここはその河川敷だ。

バイクを追ってきたウルフサイラは臭いがここで終わっているのを感じ、東を探していた。

彼らは“目的”を果たさなければ自由に殺戮が出来ない。何故かは恐らくカオス達が超古代、レジェンドとして人間に使われていた名残であろう。

狼サイラ「ふん、お遊びも、そこまで…だな！」

ウルフサイラが飛びかかろうとした瞬間、

BESTLF「はっ！」

BESTが剣で突いてきた。

不意の攻撃で怯み倒れるウルフサイラ。BESTはカードをスラッシュしバツクルをいつもとは逆方向の斜めに倒す。

LEAF Final Attack Card Charge

！

――

大智の目

!

俺は剣を縦に持ち身構える 3 緑のプラズマが俺と 2 剣を包み、【森林の力】を与える 1

パワーチャージカウントが終了したと同時に俺はバツクルを一気にいつもの方向に倒しながら言い放った。

BESTLF「リーフクロスフォース!!!」

GO!!!

フォレッツサーソードを地面に突き刺す。すると地面にヒビが入り一直線にサイラの方へ行っただかと思うと根が天を割く様に生えてサイラを完全に掴む。

狼サイラ「何!?!」

ジタバタするサイラを睨みつけながらフォレッツサーソードを抜き体の横に構える。そして地面を滑りながら横一文字に斬り滑り抜ける。

BESTLF「はっ!!!」

体を捻ってサイラの方を改めて向きながら飛び上がる。そして…

BESTLF「おりやあああああああ!!!」

狼サイラ「うがあああああああ!!!」

横一文字に斬る。

リーフフォームの必殺技、『リーフクロスフォース』だ。

爆発したと同時に無印のカードを投げる。

前も言ったかもしれないがこうしなければ時間とともに記憶が消滅してしまう。

記憶が消滅した種族の生物はある程度繁殖しているものなら数年、そうでなければ場合によつたら十日ほどで絶滅となる。

…勿論記憶が残っているのに絶滅してしまった生物もいるのだが、記憶が残っている生物は絶滅後も語られる。だが、記憶が消滅すればごく僅かな文献にすこし書かれているのが残るか否か…のみだ。

…と、そうこうしている間にカードが返ってきた。オレンジ色のカードだ。

大智「封印完了…っ」と

辺りを軽く見渡してから俺はバイクに跨った。真紅の鳥が青空に…羽いる。俺はその青空を背にバイクを走らせた。

――  
麻依の目

海斗「…何、あの姿…フォームチェンジか!!」

私達はあのあとツバサとともに逃げて研究所に戻っていた。

…海斗はご覧の通り嬉々としている。

だけど、私はとてもじゃ無いけどそんな気分にはなれなかった…

?? 『キユイ、キユイ!』

麻依「あ、お帰り!」

私はそういいながら目の前の真つ赤なスズメに目を向ける。

…実はこの子、研究所に保管されていたスズメのカードのメモリーを実体化した式神。本当に私は使えたみたい。

スズメ『ダイチ、サイラオシタ!』

麻依「ほんと!?!」

スズメ『今カエツテキテル!』

え?どうしてスズメが喋るかって?

私にはよくわか…

ツバサ「そんな時は僕に聞いて下さい!」

麻依「キャツ!?!え?何ですか?」

ツバサ「いや、なんか相談的なもの聞こえたので…」

麻依「なんでも無いです…」

ツバサ「そうですか?」 トボトボ

…なんで分かったんだろう…

でも、よく考えたらサイラも喋ってたし…だからなんか知らないけど喋れるんじゃないかな?

大智「ただいま…勝ったぜ!」

全「「「おかえりー!お疲れ、やったー!」「」」

私はとびっきりの笑顔で出迎えた。

第十二話 『MRC』（前書き）

士「さて、あらずじ始めるか」

大智「なんでお前が!？」

ユウスケ「かーなーり時間をかけて狼サイラを倒した大智達」

夏海「今回はその一週間後の話です!」

海東「なにやら海斗くんがやってるみたいだね…にしてもこのG5

はお宝だ…あと…このデータも…何々?『プロジェクト・ソー…』」

エリカ「それは極秘です!」

大智「BEST…つまり1番…俺は、1番となる者だ!」

## 第十二話 『MRC』

麻依の目

あの事件以来、私と海斗はほとんど毎日研究所に行った。  
そして、今日も。

だけど大智がいなかったからエリカやツバサと談笑していた。

麻依「それでー」

エリカ「うんうん！」

海斗「クククツ」

ツバサ「ハハハハツ」

大智「ただいまっ」と

麻エリ「おかえりー」

海斗「なにしに行ってたの？」

大智「いや、ちよつとメシの買いだ…」

大智の表情が曇る。

大智の目はただ一点を見ていた…そして

大智「なんじゃありやあああああああ！！？？」

――



私と海斗とツバサとエリカとついでにダイキが正座させられていた。

大智「…誰が貼ったんや？あれ」

とりあえず全員、主犯の名前をだす

麻ツエダ「…海斗」

海斗「ちよつと待って！？ツバサも一緒に貼ったじゃん！？」

大智「そうか…で、あれはなんや、あれは？」

大智が「あれ」を指す。

そこには、大きく『MRC』、その下に『TAKAMILAB』、そして中央に仮面ライダーBESTを表す『B』の文字が刻まれた旗だった…

大智「あれはなんや？」

海斗「『仮面ライダー部』の旗です…」

大智「『仮面ライダー部』？」

海斗「うん…今放送されてる仮面ライダーに…そんなのがあったから…んで…俺たち、部活やってないだろ？だから…」

大智「部活じゃねえだろ、まず学校外だし」

海斗「そっそっただけど…」

大智「ま…とりあえず…」

大智は大きく息を吸い…そしてため息と共に

大智「いいんじゃないか？『仮面ライダー部』」

海斗「え！？いいの！？」

大智「但し！…海斗、歯ア食いしばれ…」

海斗「…え？」

ゴツン！！

海斗「ツテエ…ヒデエ…」

大智「ヒドくない！…それと、旗の場所…邪魔だからを変えるのと、名称を『仮面ライダーサークル』にすること。部活じゃねえし、場合によつたら政府から金が貰えるんだ、部活にも出来無い」

麻依「それじゃ…」

大智「…俺は会員No.6…だな？」

全「…やったあああああ！！」

海斗「あと大智はNo.1だよ！仮面ライダーがいなきゃ仮面ライダーサークルじゃないし！！」

大智「ははは…分かったわかった…ダイキ、コーヒーくれ」

ダイキ「ああ、分かった」

大智「…やれやれ」

――

ピンポン

何気ないチャイム、だけどわたしと海斗以外の全員が動きを止めた。

エリカ「はい」

エリカが走って行く…その顔にさっきの笑みは無かった…

大智も顔を真顔にして、机を軽く片付けている。

エリカ「どうぞ…」

男「すまないな…エリカ」

大智「お久しぶりです、西村さん」

男「おお、久しぶりだな…大智」

エリカと一緒に一人の男…西村と言う人が入ってきた。

大智「…」

西村「私が来たらすぐに顔をそんな風にするな…まあ、無理もない…おや？彼らは？」

大智「ああ、俺の友達です」

海斗「一之瀬海斗です」

麻依「佐原…麻依です」

西村「なるほど、私は内閣情報調査室特殊科の…西村にしむら 誠まことだ」

え…もしかして…

麻依「内閣情報調査室!？」

西村「…ん?知ってるのか？」

麻依「はい…エリカから以前…」

西村「…我々を知っているから大層政治に興味があるのかと思った

が…なるほどな」

海斗「ないかくじょーほーちよーさしつ？」

西村さんは笑顔を絶やさず説明してくれた

西村「内閣情報調査室とは、名前の通り内閣の下で日本のありとあらゆることを調査するところだ。そして、私が所属する特殊科とは現代科学で解明出来無い事柄を扱っているんだ…あ、現代科学で解明出来無い事柄っていうと例えば…そうだな…お化けとかならわかりやすいかな？」

海斗「じゃあ、ここになんで？」

西村「我々の手におえない事件が起こったからだよ。警察は動けないし、僕達は止めることが出来無い。だけどBESTの力を使えば解明できる事件を依頼しに来たんだ」

麻依「じゃあ警察とは…」

西村「全く関係ない組織だね。…でもまあ、こうして私も拳銃を所持してるから間違われても仕方ない…かな？」

そういうと西村さんはおもむろに懐に手を入れ黒い塊を見せた。「「ULTIM1900」まあ、ホントにサイラが出てきたらこれでは対応不可だけどね」と笑みを見せつつもう一度しまう。

麻依「…よく考えたら…G5の装備品…あれ銃じゃ無い？」

西村「ああ、あれは特例許可を政府からもらって…ね」

大智「とーさんが作った。全く…どこでこんな物騒なものの作り方を知ったのやら…」

大智は頭を掻きながらボヤク…

西村さんも私もははは…と笑う事しか出来なかった。

西村「尤も、警察の方も対策本部を渚沙市において居るみたいだけど、それでもBESTの事を知ってるのはほとんどいないんじゃないかな？」

海斗「だから大智を発砲したのか…」

西村「え！？撃たれたの!？」

大智「ええ…まあ、変身後ですが…」

西村「良かったあ…いや、良くないか…あ、まあ、説明はこのくらいで…」

西村さんの顔から笑みが消えた。

西村「本題に移ろうか」

――

大智「はい、事件とは？」

西村「うん…今回は今までに無いケースだ。最近、この渚沙市で毎日一人、不可解な自殺を遂げている」

海斗「自殺？自殺に不可解ってあるんですか？」

麻依「…海斗、話は最後まで聞こうよ？」

西村「…で、なんで不可解かと言うと、最初の自殺者は、当日やつと2年越しの想いが彼に届いて付き合い始めたそう。二人目はなんとガンを克服してその日退院したそうなんだ」

ツバサ「確かに不可解ですね…イジメなどは無かったのですね？」

西村「そう、それどころか皆生きる希望に満ち溢れていたそう。自殺するような状況でもそんな性格でも無かったそう。…そしてなに

より、自殺する瞬間を目撃している人が必ずいて、皆口々に『なにか異様なモノが自殺者の後ろにいたけど、その人が死んだ後何時の間にか消えていた』と語っている。最も、彼ら全員精神異常と診断されているのだが……」

大智「なるほど……確かにサイラの可能性がありますね……」

西村「そうなんだ……ところで君たちは危険だから帰った方が……」

海斗「大丈夫です！」

麻依「……たぶん……」

西村「そうかい……？まあ……」

テレビ「たった今入りました情報によりますと……」

ダイキ「おい！みんな！」

大智「何々……」

テレビ「……調べによりますと死体の身元は渚沙市に住む会社員平松宏人さん二十八歳で……警察は自殺とみて捜査を……」

全「……」

全員黙り込む……

少しの間の後、不意に大智が口を開いた。

大智「……エリカ、出来るか？」

エリカ「やってみます」

もちろんこの人が最近どういう状況におかれていたか……だ。

エリカ「ダメです、掛かりません」

大智「まあ、そうだろうな……」

ツバサ「じゃあ僕、聞き込みに行きます」

海斗「俺も」

西村「ちょ、ちょっと!?まだこの事件との関連が決まったわけじゃ……」

大智「結論をまっていたら時間が掛かります、なら間違ってもいい、情報を集めなくては……」

西村「んー…じゃあ、私は以前の不審自殺についてももう一度リサーチするよ」

大智「ありがとうございます」

西村「依頼元が協力しないわけないよ…パソコン借りるね」

みんなまた慌ただしく動く…

海斗とツバサはもう研究所を後にした…

大智もエリカもダイキも西村さんもパソコンやらテレビやらで情報を集める

だけど……

麻依「…また…だ…」

――

### 大智の目

海斗達のお陰で彼は新たな事業が成功して今から頑張っで行こうと希望に満ちていたようだ。

西村「不審自殺…か」

麻依「そういえば、サイレンが鳴らないからサイラじゃ無いんじゃないかな…」

大智「…果たして…そうかな…昆虫の記憶…イノセントカオスが使うサイラはこのサイレンに反応しないヤツがいる…厄介だな」

イノセントカオス…昆虫の記憶

こいつが作るサイラは多種多様だ…それゆえ最も注意が必要となる

西村「それにしても…高見博士は凄いね…感心するよ…」

大智「…」

西村「何もかも独学なのに御存命ならノーベル賞を取ってしまうくらい偉大な方だった…」

大智「…越えられない壁…」

麻依「…え？」

大智「ふふっ…なんでもない」

越えられない…いくらもがいても…

科学者として…人として…

海斗「あとは…明日誰の前に現れるか…だな」

ダイキ「あ、ちよつといいか？」

大智「どうした？」

ダイキ「これを…」

そういうとダイキは机に渚沙市の地図を広げた。

ダイキ「これまでの不審自殺を地図にまとめた…一件目がここ…二件目…三件目…」

次々に印がついていく…

ダイキ「そして、今日は…ここ」

最後の印が付いた…これは…

大智「…七芒星…」



麻海「…?」「」

大智「五芒星や六芒星とならび評される図形だ…その意味は…『光』…」

ダイキ「そう…そして…最後の点を入れるとしたら…ここだ」

ダイキは予測地点に丸をつける。

西村「…絞れたのはいいが…何のために…?」

大智「…分からないですね…ただし、これで場所は絞れた…あとは  
幸せそうな人を捜して…」

麻依「…いや作ったらいいんじゃないかな?」

全「…?」「」

エリカ「どうやって?」

麻依「良くあるじゃん?こっ…」

……翌日……

リゴーン リゴーン リゴーン

おめでとー!

おめでとー!

おめでとー!

その日、渚沙市北西部の教会では結婚式が執り行われていた。

惨劇を呼ぶかの様に…

そして…惨劇を始めようと異形の者と一人の男がその様子を見てい

た。

「……ほう……こんなところでな……」

「……これで……これで僕は……」

「……ふふふ……ならばアレで最後とするか……」

異形の者はその姿を陰に隠した。

最後の仕事の後訪れる惨劇を思い浮かべながら……

第十三話

WATER 水流の記憶 x 失い、現れた光（前書き）

大智「…正直、あらすじめんどくせえ…」

士「そう言うな、大智」

大智「…これを見てそう言えるのか…？」

弦太郎「あらすじキターー！！」

ユウキ「こつちの世界では『マスクドライダーサークル』が発足したみたいね！」

賢吾「…いや、俺は認めない…『仮面ライダー部』も『マスクドライダーサークル』も…！！」

大智「…いや、あらすじしろよ…orz」

士「何と言うか…どんまい」

あらすじ省きます「省くのかよ！？by大智」

大智「BEST…つまり一番…俺が一番となる者だ！！」

第十三話

WATER 水流の記憶 × 失い、現れた光

――渚結婚式場――

??? 「あー疲れたつと」

花嫁姿の人はふうとため息を付きつつ控え室の椅子に一人でくつろいでいた…と、疲れからか寝てしまったようだ。

当然、この部屋にいた招かれざる客の存在など気づく筈も無い。それもそうだ。部屋に入った時には何者も見えない筈なのだから。

??? 「くくくつ…まさか今から死ぬことになるとは思っまい…」

異形の者が少し姿を表しつつ右手首に狙いを定める。その手にはナイフがしっかりと握られていた。

??? 「くくくく…死ね！」

異形の者はナイフを振りかぶる。そして…

??? 「ぐはっ…！」

強烈な肘鉄が異形の者…モースサイラの腹に入る。  
その反動で今まで完全には見えなかったその姿が明らかとなる。

――高見研究所――

P i P i P i P i P i P i …

エリカ「大智？女性控え室から反応が！！…うん！！…うん！！…分か  
った！」

ツバサ「ダイキ！女性控え室の方だ！！すぐに…ああ！！頼んだ！」  
麻依「海斗…頑張つて…」

――渚結婚式場――

???「はあっ！！」

蛾サイラ「グフツ！」

ストレートパンチがサイラに入る…そうするうちに花嫁の衣装がと  
れていく…

???「おりゃああああ！！」

蛾サイラ「うぐうう！？」

これで最後と言わんばかりに投げられ、モースサイラは怯む。

しかしこの程度で大ダメージを受けるほどヤワではない。

すぐに起き上がってみると…

海斗「…クソ！きかねえか…」

一之瀬海斗がいた。

蛾サイラ「な！？何！？男なのか！？女なのか！？」

海斗「はんっ！策士策に溺れる…ってかぁ？お前の行動は単調過ぎた！」

――

全「方法？」

麻衣「はい！海斗！人生で一番幸せな瞬間って？」

海斗「え！？ええ！？」

ツバサ「ここはベタに結婚…とかじゃ無いですか？」

麻衣「そう！そして、この予測地点には…すぐ近くに結婚式場があるよね！なら…ここで模擬結婚式をやって呼び寄せて……一気に叩く！！って言うのは？」

ダイキ「しかし…そんなに簡単に上手くいくか？」

大智「ああ…外れたら…」

西村「大智くん、やらずに後悔するよりやって後悔した方がいいですよ！？それに予測地点は近く。もし失敗してもチャンスはあるよ！」

大智「しっしかし…」

海斗「大智！やろうぜ！！」

麻衣「大智！！お願い！！」

大智「…」

――

蛾サイラ「クソッ！！」

モースサイラは飛びかかり海斗を殺そうとする…が

海斗「甘い！殺気が出すぎだ！！」

そう叫びながら相手の攻撃を右に左に受け流し敵の気の波長に合わせる。

大きく振りかぶった右拳がくるのを確認するとまるで水の如く流し、さらに自身の気を使って投げ飛ばす。

海斗「これぞ、海野流合気道術、伍の型！竜仙！！」

海野流合気道の技を最大限に生かし発展させた海斗の投げに流石のモースサイラも少しダメージが残る。

海斗「お前が人間なら…とつくに意識失ってるぜ？」

蛾サイラ「ぐっ…」

大智「海斗！！」

海斗「お！遅いぜ大智…」

大智「すまんすまん！」

海斗「な？引つかかっただろ？」

ダイキ「まさか…な…」

大智「…しかし…お前…女装似合いすぎる…」

海斗「だつ大智！無駄口叩かずに早くたおせ！！」

大智「ああ…それより…やはりイノセントのサイラか…！！」

蛾サイラ「もしやお主は…？」

大智「フツ…一番となる者…BESTだ！！変身！！」

BEST Card Change！

ダイキ「変身…」

P i P i P i Enter G 5！

――

先程のダメージを大体回復したモースサイラは結婚式場を飛び出した。それにBEST、G5も続く。

蛾サイラ「まさかお主らがいたとはな…だが…俺は目的を果たさねばならぬ…邪魔者は失せよ!!」

BEST「それは無理な相談だな…お前らが人を殺さないなら…考えてもいいが？」

蛾サイラ「…ふんっ…それこそムリだな…はあああつ!!」

モースサイラがBESTに向けて飛びかかる。しかしサイラの拳が出るより先にG5が殴る。G5の重い装備通りの一撃が次々にサイラに浴びせられる。

G5「ハッ、ハアッ！」

蛾サイラ「ぐはっ!？」

海斗「大智!!大丈夫!？」

ようやくここで海斗が追いついた。

BEST「おっと、海斗!？危ないぞ!？」

海斗「大丈夫、シヨット借りてるから」

それで大丈夫な保証は無いぞ…大智はそう思いながらカードを取り出す。

BEST「とりあえず…これにしておくか…」

Water Card    Challenge!

すると大智を中心として蒼いプラズマと水のようなものが球状に集まる…そして…

BESTWF「ハアッ!!」

右手でそれを裂く…するとそこにはやはりいつもの姿はない青いベストフォームのフォルムを纏い全体的に流線形のスタイリッシュなウォーターフォームへと変身を遂げていた。

ベストフォームとの違う点は形、色だけでない。その一つが右手に構えているのはリバーマグナム。これにより遠距離射撃を可能とする。

海斗「…すげえ…」

BESTWF「オイオイ見とれずに隠れるなりなんなりしろ」



海斗「あー！もう、分かった！分かった！」  
そうして大智は海斗が少し距離をおくのを見てから射撃をしながらサイラに近づいていった。

一方こちらではモースサイラが息を吹き返し肉弾戦となっていた。  
蛾サイラ「はああああっ！！」

G5「おりやつ！…ああ、動きにくい…！！」

BESTWF「すまん、ダイキ！俺が変わろう」

G5「ああ…頼んだ」

そうするとBESTはサイラに蹴りや銃撃を行いG5は少し距離を置く…

周りを確認したあとダイキはコードを入力する。

P i p i p i

するとG5の装甲の亀裂部分から強烈な光が漏れ出し次々に装甲が浮き上がる。

G5「大智！どいてろよ！」

そう叫ぶが早く決定する。

E n t e r    L o s t G 5 !

L G 5 「ハアツ！！」

その叫びとともに全身から一層強烈な光を発しG5の分厚い装甲の外側が弾け飛ぶ。そのアーマーの直撃によりサイラは吹き飛ばされるが、サイラが気がついた時にはもうそのアーマーは無い。そしてみると光を纏った戦士…仮面ライダーLostG5が姿を表した。

L G 5 「ふう…行くぜ…」

そう言つが早く走り出したかと思うと直ぐにサイラの前に現れ、声が出るより早く殴る、殴る、殴る。

L G 5 「ハアツ！！」

蛾サイラ「グツ!?!」

そう、このL G 5、防御力や攻撃力は落ち更にはG 5では使えていた武器の一部が使用不可となる上バッテリーの消耗が激しいという文字通り“劣化G 5”なのだが、スピードが上がる…オーズのラトラーターに負けを取らないであろうスピードがでる。G 3系統システム最大の敵、スピードに特化した形態なのだ。

L G 5「ハアアアアアアアアアアアアツ!!!」

その間にも無数の蹴りが入る。さらにL G 5の少しの間にはB E S T がリバーマグナムで銃撃しモースサイラにダメージが入る。このままだと倒すのも時間の問題だ。

その時、

??「止めてくれ!!!!!!」

男性が叫びをあげた。

### 第十三話

WATER 水流の記憶 x 失い、現れた光（後書き）

今回は珍しく後書きを書こう。

海斗が女装適合www

これはド耐で生かせますね！

できればは…麻依がシヨック受けるくらいです

海斗の特技、合気道キターーーー！！

陰陽師 気功 合気道って感じでこの設定

海斗の海野流合気道術ですが…自分合気道習った事も見た事も無いので（マンガの主人公がやってたのを読んだくらい）ご教授頂ければ幸いです。

柔道はやってたのですが それでも弱小でございます。

大智がウォーターフォームに、ダイキがLostG5に…！

BESTのフォームチェンジが増えましたね！

まだまだですよー、いつになるかは知らないですが

G5のこのフォームチェンジと言うかなんとやらは実は全く構想にありませんでした。ダイキにG5着せたら重いというかなあと思っ  
て急遽作りました。

ちなみこの時海斗はちゃっかり着替えてる設定です。

G5のファイズの要素には目をつむって下さい。

はい、なんか最後に男が出ましたー。

次回でコイツがちょっとやらかします

どうぞ乞うご期待！…しないして下さいね…！！…！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1916w/>

---

仮面ライダーBEST ～一番となる者のキセキ～

2011年11月20日18時00分発行